

# 雪女と散歩



きのう よる ぼく まち ゆき ふ  
昨日の夜、僕の街で雪が降りました。

さむ す ひと とくべつ ぼく  
寒いドイツに住む人にとっては、特別なことではないかもしれませんが、僕は

あたた にほん みなみ す  
暖かい日本の南に住んでいます。

ここでは雪はほとんど降りません。なので、その白い花びらを幸運にも見るこ

とが出来たのは、昨日が初めてでした。

「のび太くん！」朝、お母さんが僕を起こそうと呼びました。

「のび太くん、雪が降っているわよ！起きて着替えて、早くおばちゃんのとこ

ろへ行ってあげて。おばちゃん、寒くなるのに何も用意してなかったから、分厚

い洋服がいの。このコートと、帽子と、それから手袋も持って行ってあげて。」

「えっ？」僕は寝ぼけ眼で答えました。

「わざわざおばちゃんのところまで行かなきゃいけないの？でもすごく遠いし、

そと さむ  
外はとっても寒いよ...」

「のび太くん、あなた男の子でしょ！それに外は真っ白でとても綺麗よ！きっ

たの  
と楽しいわ！」

ことば すべ き  
その言葉で全てが決まりました。

ぼく あつで き おも ふゆよう くつ は しゅっぱつ  
僕は厚手のコートを着て、重い冬用の靴を履いて出発しました。

まだまだ空から雪が落ちてきていて、目の前の道も普段と違って、見分け  
が付きませんでした。小さい丘を歩いて、滑って転ばないように注意しなければ  
なりません。

なんて綺麗なんだろう！

そして街はとても静かで、まるで人々は皆眠っているかのようでした。

全くどこにいるかわかんないや。どっちを向いても、白、白、白！

もう道に迷っちゃったのかな？この家も知らないし、あっちの家も見事ない

...。こうやって雪にすっかり囲まれちゃうと、なんだかちょっと気味が悪いや。

ひとりぼっちで怖くなって、道に迷ったような気もするし...。そんな時、前に

一度聞いた怖い話を思い出しました。

激しい吹雪の中で人々を驚かせ、道に迷わせるお化け、雪女の話...。あん

なの、子供だましの話だけど、でも...

風は絶え間なく吹いていて、まるで冷たい手が喉に触れるかのよう。

あの遠くに見える、気味の悪いシルエットは何？長くても大きい！ただの木に決  
まってる！

もちろんそれはただの木でしたが、それでも僕は恐ろしくなって、わっと駆け出  
しました。

心臓がドキドキしながら、僕はおばちゃんの家を探しました。

あっ！ やっと！ あのとんがり屋根の、お庭に桜の木があるお家！ 見つけた！ 良

かった、やっと見つけたよ！

おばちゃんが玄関のドアを開けてくれるや否や、僕はおばちゃんに飛びついて、

腰に顔を埋めました。

「麻美子おばちゃん！ 怖いよう！ 雪女が！」

「あらあら」おばちゃんは落ち着いた声でなだめると、僕をリビングへと連れて

て行きました。

「雪女を怖がる必要なんてないのよ。」

僕はおばちゃんに持って来た服を渡し、一緒にリビングで温かいお茶を飲みました。

「でも知ってる？」おばちゃんは聞きました。

「どうして雪女がお化けになってしまったか。」

僕は頭を横に振りしました。

「彼女は若い女の人だったの。吹雪で道に迷ってしまってね、一人寂しく亡く

なったのよ。今はお化けになってしまったけどね、小さな子供を傷つけるよう

なことは絶対にしないわ、のび太。」

興味深くおばちゃんの話聞いていた僕は、そのことについてよく考えてみ

ました。

ほんとう ことわ ひつよう  
本当に怖がる必要はなかったのかな？

たし はなし すじ とお ゆきおんな わか おんな ひと ぼく  
確かにおばちゃんの話は筋が通っている。雪女は若い女の人だったんだ。僕

とそんなに年も変わらなかったかもしれない。

うんめい いま ぼ ふ し ぎ  
なんてひどい運命なんだろう。今もお化けとしてさまよっているのも不思議じやない。

ちゃ ぼく い くつ あし すべ こ  
「お茶、ありがとう！」僕はそう言うと、靴に足を滑り込ませました。

かえ みち こわ  
「帰り道はもう怖くないさ！」

おもて で ゆき ふ まほう ひか  
表へ出ると、まだまだ雪は降っていて、まるで魔法のように光っていました。

ゆきおんな かみ おんな しろ  
雪女の髪も、同じくらい白いのかな？

ゆきおんな こえ き ぎ あいだ はし かぜ こえ  
雪女の声も、木々の間を走りぬける風のような声なのかな？

ゆきおんな いけ ふ つ ゆき つめ  
雪女のほっぺたも、池に降り積もった雪のように冷たいのかな？

かえ みち ゆきおんな あ まった しんばい  
帰り道は、雪女にばったり会うかもしれないということは全く心配しません

みち まよ いえ わか しんばい  
でした。道に迷って、家が分からなくなる心配も、もうありませんでした。

は ぼ き も かど ま ひそ き すがた み  
晴れ晴れとした気持ちで、角を曲がるたびに、密かに消えかかりそうな姿を見

おんな ひと いっしょ いえ かえ おも  
つけ、かわいそうな女の人と一緒に家まで帰れないかな、なんて思っていました。